



© 24 SANRIO CO., LTD. APPR. NO. L646652

NIE
教育に
しんぶん
新聞を

4

小学1・2年生向け

こどものためのもしもマニュアル 「きんきゅうじたいにつかうもの」が わかる本 ②町の中 編

佐藤 健 監修 WILLL ちいけんきゅうじょへんちよ
研究所編著

皆さんは、公衆電話を見かけたことがありますか？ また使ったことはありますか？ 公衆電話とは、駅や公園にある「だれでもつかえる電話」で、10円玉、100円玉、テレホンカードを入れるとかけることができ、スマートフォンがないときや、つながらないときに使います。まず受話器を取って耳と口に当て、10円玉などを入れ、かけたい電話番号を押し、つながったら話します。事件や事故などで、警察や消防に助けを呼びたいときは、赤いボタンを押すとお金やテレホンカードがなくても電話ができるものもあります。みなさんも緊急の場合に備えて、公衆電話の使い方を覚えておきましょう。



(理論社 2750円)

小学3・4年生向け

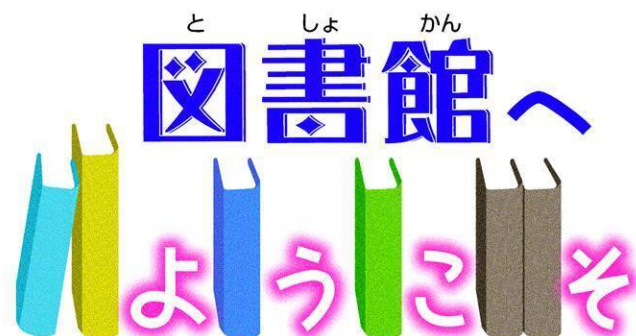
ぼくは発明家 アレクサンダー・グラハム・ベル

メアリー・アン・フレイザー作・絵 おびかゆうこ訳

「電話の父」と呼ばれるアレクサンダー・グラハム・ベルを知っていますか？ ベルは今から170年以上前にスコットランドで生まれました。ベルのお父さんは、うまく声を出せない人たちに、視話法という特別な声



の出し方を教えていました。お母さんは耳があまり聞こえませんが、ピアノがとても上手で、家の中にはいつも明るい歌声が聞こえていました。ベルは小さい頃から「どうして、ぼくの耳には、音が聞こえるんだろう？」と考え、世界中の音を、お母さんの耳に大きくはっきり届くようにしたいと思っていました。あるとき、ベルはお父さんから「音は、振動なのだよ。」と教えてもらいます。そこで、自分の体を使って、実験してみることにしました。 (あかつき教育図書 1760円)



電話の技術や「音」を知る

1890年12月16日、日本で初めて電話が繋がりました。この電話創業の日になみ、公衆電話の使い方がわかる本、電話を発明した人の伝記、いろいろな音が出てくる本や電話の歴史について書かれた本を紹介しします。

(山梨県立図書館 佐久間絵梨)

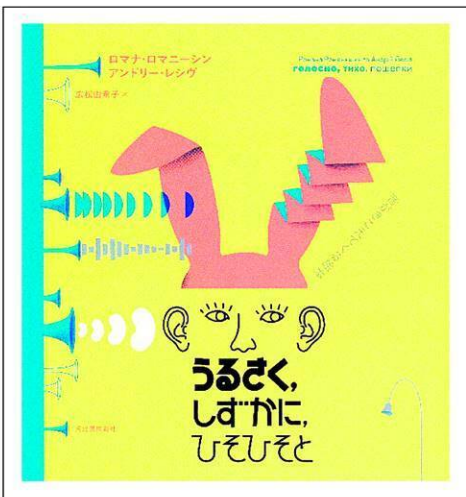
=毎月第2週に掲載します

小学5・6年生向け

うるさく、しずかに、ひそひそと

ロマナ・ロマニーシン、アンドリー・レシヴ著 広松由希子訳

音とは何でしょうか？ 音とは、「耳とそのおくの聴覚器官が感じとる空気の流れ」です。音には静かな音やうるさい音、低い音、高い音などさまざまな音があります。知っている音と知らない音の中で「きもちいい音の流れや組合せ」を探していくと、音楽になります。人間は自分だけの音、「声」を使い近くの人とやりとりしたり、歌ったりすることができます。遠くの人とは電話で話すことができます。また、人間は「音」が違う言語を使いますが、言語は音に限りません。耳の不自由な人たちが使う手話など、声を出さない人の言葉も聞くことができます。家の中や町中には音があふれています。皆さんも耳を澄まして、いろいろな音を聞いてみませんか？ (河出書房新社 2200円)



中学生向け

くらしを変えた日本の技術

未来技術遺産でわかる工業の歩み ④情報・通信

国立科学博物館産業技術史資料情報センター監修

1876年、ベルによって電話が発明されると、音の振動を電気信号にして電話線で運び、相手の電話機に声を届けることができるようになりました。1890年、日本で初めて電話が開通しました。当時は東京と横浜間のみ使うことができました。1912年には、日本の技術者たちが、電話線を使わずに電波で音を送受する無線通信を実用化します。これは、世界で初めてのことで、現在の携帯電話やスマートフォンにもつながる、暮らしを変えた新技術でした。本書は、電話が発明されてから現在までの歴史のほか、スマートフォンなどの電話の仕組みなどについても詳しく書かれています。私たちの生活に根付いた電話の歴史がわかる一冊です。 (くもん出版 3080円)

